

## 「わたしたちの へいわ と せんそう」

図書館では毎月2回、読書会を開催しています。これまで、平和と戦争を考えるきっかけとなるような本を多く取り上げました。そのうち2016-2019年に話題にした9冊を中心に、平和と戦争についての本を紹介します。

8月15日は終戦記念日。戦争を知らない私たちだからこそ、戦争の悲しさ、恐ろしさに思いを馳せる時間を作ることが大切なのだと思います。  
(大久保美玲)



### 井上ひさし『父と暮らせば』新潮社 1998

生命を落とさずに済んだことは本来ならば喜ぶべきことなのに、生き残ったことへの罪悪感を抱かせるほどの心理状態に追い詰める戦争とは何だろう？ そして、そのような人たちこそ幸せになってほしいと願いを込めて井上ひさしはこの戯曲を書いた。私たちが戦争のことを知るためにできることは、本を読んだり、映画を観たり、体験者から話を聞くことしかできないが、この本はその一冊である。  
(原真由美)

### 壺井栄『二十四の瞳』角川文庫 2007

「肩をふって走ってゆくそのうしろ姿には、無心に明日へのびようとするけんめいさが感じられる。その可憐なうしろ姿の行く手にまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろうか」(p.231)。誰もが戦争から逃れられず、罪のない無垢な子どもまでも戦争に憧れるような思想を植え付けられた時代の恐ろしさ、母親のやるせなさが、大石先生の目を通してひしひしと伝わってくる物語。  
(大久保美玲)



### 灰谷健次郎『太陽の子』角川文庫 2018

太平洋戦争で日本唯一の米兵が上陸したところが沖縄。島民が日本兵に殺されたとも言われる激戦地であることを知った上で読まなければいけない本。

主人公をはじめとした登場人物が住む沖縄では、まだ終戦になっていないかもしれないと感じた。  
(高橋和子)



#### 【上記以外で取り上げた本】

- ハンス・ペーター・リヒター『あのころはフリードリヒがいた』岩波少年文庫 2003
- 近藤康子『コルチャック先生』岩波ジュニア新書 1995
- 桐野夏生『だから荒野』文藝春秋 2007
- 原民喜『夏の花』集英社文庫 2012
- 林京子『祭りの場』講談社文芸文庫 2017
- 野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』新潮文庫 2016